

公益社団法人 横浜市幼稚園協会発行
 〒221-0055
 横浜市神奈川区大野町1-25
 横浜ポートサイドプレイス アネックス5F
 電話 045 (534) 8708
 http://www.kids-yokohama.or.jp
 編集 横浜市幼稚園協会広報部
 発行者 木元 茂
 印刷所 合資会社横浜大気堂

協会報 浜私幼

教職員版

No.261

- ▼第52回 横浜市幼稚園教育研究大会
- 第54回 神奈川県私立幼稚園教育研究
横浜地区大会 開催
- ・シンポジウム要旨
- ・分科会報告



第52回 横浜市幼稚園教育研究大会 第54回 神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会 「今だから考えよう! 幼稚園教育の本質を!」

平成27年1月24日(土) 神奈川県県民ホール他

寒さが一段落し、春の気配も感じられるようになった平成27年1月24日、改装を終えた神奈川県県民ホールの大ホール他で「第52回横浜市幼稚園教育研究大会」が開催された。「今だから考えよう! 幼稚園教育の本質を!」をテーマに、開会式、全体会は横浜市内の幼稚園教職員のほか、保育園関係者、保護者、一般申込者など4000人を超える参加があり、大ホールに加え、モニターのある小ホールも使って盛大な開催となった。

開会式では、まず運営委員長で神奈川県私立幼稚園連合会会長の小澤俊道氏より、「県連合会の役割は、神奈川県行政当局に県下670園の声を届け、いかに幼児教育へのご理解をいただくかと、私立幼稚園の経営基盤である経常費補助の拡充のお願いをしていくこと。県からは日々の幼稚園運営に大きな力を注いでいただいている。教育の質の向上、保護者負担の軽減、幼稚園教育の無償化、幼児教育振興法の制定、子ども子育て新

制度への対応など国レベルでの関わりを全日本幼稚園連合会は進めており、県連はその一員となっていることを横浜市協会の一人ひとりにご理解いただきたい」との挨拶があった。続いて、木元茂横浜市幼稚園協会会長が、「平成26年は新制度実施前年で苦しい判断を強いられたが2割程度の移行の予定。市の財政的バックアップと実施準備に向けての行政の皆様のご尽力に大いに感謝したい。4月からも幼稚園に今まで以上の熱いご支援をいただきたい」と述べ、全体会での上智大学那須先生の講演内容や、パキスタンの女学生マララ・ユスフザイさんの言葉を紹介して、「子どもにとって、横浜市にとって質の高い幼児期の教育とは何かは考えるべき大切なテーマであり、今大会にはその多くのヒントがあると思う」と結び、本日の講演、研究発表への期待を述べた。続いて来賓を代表し、柏崎誠横浜市副市長より祝辞をいただいた。同副市長は、「4月に幼児教育と保育に関わる新



木元 茂
横浜市幼稚園協会会長



柏崎 誠
横浜市副市長

しい仕組みがスタートする。横浜市としても切れ目のない支援を行い、充実した教育や保育を提供できるよう準備を進めている。行政もしっかり取り組みたい」と述べられ、幼児期から小学校への育ちと学びを繋ぐため、横浜版の接続カリキュラムを作成、活用し、現場で円滑な連携の事例を積み重ねていること、まさに本日のテーマの核心ともいえる連携が進められていることを本会の成功への思いと重ねて述べられた。

また、午後からは、各会場で9分科会に分かれての研究発表が行われた。



横浜市幼稚園教育研究大会 全体会 要旨

小学校以上の教育改革を見据えたうえで、 幼児期の教育を考える

～新たな制度が始まる時に、改めて子どもの育ちや学びを問う～

講師
上智大学総合人間科学部
教育学科教授
奈須正裕先生



講師
玉川大学教育学部
乳幼児発達学科教授
大豆生田啓友先生

資質能力(コンピテンシー)とは

奈須先生

子ども達にとって大切なのは、資質・能力(コンピテンシー)である。すなわち思考力、意欲、コミュニケーション能力がとても大切である。現在の学力テストには、A問題とB問題がある。A問題はコンテンツベース(何を知っているか)、B問題はコンピテンシーベース(どのように問題解決をするか)であり、日本は圧倒的にA問題ができるが、B問題はできない現状がある。これからの時代、知識をどのように使って生きていくか、解決できるかということが大事なので、小学校でもB問題の学力を重視していこうという動きがある。

1970年代アメリカの心理学で、コンピテンシーベースの考え方が生まれ、今ではヨーロッパ、アメリカ、ニュージーランドで、すでにコンピテンシーが重要であるとされている。日本でも平成30年の学習指導要領改訂に向けて、コンピテンシーの角度から教育を考えることができないうかという動きが大きく

なり、知識は大事だが、それをどう使うか、どう学んでいくかを小中高で考えようとしている。

幼児教育は最も大事な時期である。子どもの考えや思いを受け止め、人間関係の中で遊びを充実させ、幼児期の原点をみつめて小学校に進学させることが大切である。現在日本の大学入試も多様化し、学力だけでなく、AO入試、推薦入試、一芸入試等になっている。これまでに経験してきたことを生かして、その人らしく問題解決ができるかというコンピテンシーを重視した入試に変わりつつある。自己発揮しながら遊ぶことが幼稚園の活動である。すでに小学校教育では、子どもの経験を持ち込んだ方が本質に迫る学習になることに気付いている。小学校はフォーマルな学びの場で、具体的、個別的、特殊的な、暮らしの実感を取り込みながら学習している。幼稚園の遊びは、インフォーマルな学びで、例えば「レストランごっこ」を通して、数について学ぶことがある。生活と結びついていないと、実際に使えない。「私」とかかわりのある学びを幼児

期から大学まで積み上げていくことが本当の学びに繋がる。幼児期に子どものインフォーマルな学びを伸ばしていくことで、本質に迫るように考えられるようになり、小学校でのフォーマルな学びに繋がっていく。自分の遊びや暮らしに繋がる知識は、自分の生き方に繋がる。その原点が幼稚園教育である。

自己肯定感

大豆生田先生

幼児教育は最も大事であるのに、幼稚園教諭と小学校教諭の給料に違いがあるのは日本だけである。アメリカでは、良い幼児教育を受けた人と受けなかった人では、大人になってからどのような違いが出てくるのか調査した結果があり、犯罪率が少なかったり、収入が高かったりといろいろな優位差が表れることがわかっている。幼児期の良い保育とは、遊びを中心としたプログラムである。質の良い保育を受けることで人間の根っこの部分が作られ、社会的な自己肯定感やコミュニケーション力が身に付くといわれ

ている。つまり幼児教育=コンピテンシーである。

残念なことに、日本の子どもに自己肯定感について尋ねると、56%が自分はダメな人間と答える。世界的に自信がないのは教育の在り方が深くかかわっている。幼稚園は、協同的な遊びを通して、ワクワクしながら、自己肯定感を持ち、いろいろなことに関心を深めていく場である。

これからの〈日本の課題〉は……

奈須先生

- 1 判断の根拠や理由を示しながら、自分の考えを述べること。
- 2 自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識を育てること。

この課題のためには、活動のプロセスで子どもの発想や声を聞きながら、なぜそこに至ったのかという道筋を考え、協同的に議論して折り合いをつけて自分のものにしていくような教育が重要である。大人が見通しを立てることは大事だが、子どもの声を聞き受け止めて、ひとりの人間としてどういう時間を作ってあげることが大切である。

小学校の内容を幼児教育に下ろすのではなく、考える基盤を作ることが重要である。そのためには、先生には子ども達の発想の道筋や知的探究心を引き出す役割がある。

また、グローバル化と言われるが、訓練的に英語が話せることが重要ではなく、文化的背景の違う人とかかわっていきこうとすると、異文化との交渉が適切にできることが大事になっていく。

子ども達が、障がいを持っている子に対して、特別な目で見ないのは、同じ人間として見ているからで、人間としてかかわることができるのは、自分も自信(肯定感)に満ちていて人間の尊厳を持っているか

らである。自分が価値のない存在だと思っていると、他者も価値のない存在だと考えがちに育ててしまう。自分を愛せないのに、他者を愛せるはずがない。小さい時に、いろいろな子どもとかかわり、厄介なことが起きながらも乗り越えることで、子どもも先生も保護者の世界も広がっていく。子ども達にとって、大人の了見が狭くならないことがとても大切である。

道徳教育はこれからどうなっていくのか?

奈須先生

今までの道徳教育は、教え込むようなやり方で、実感のないものだったが、道徳は人間の根幹にかかわることである。そのため、これからは別の方法を考えている。幼稚園では人間の生き方、在り方、道徳性をどう考えていくのか。先生が言うから訳も分からずにやる、背面服従が一番怖い。子どもに対して人間のあり方に責任を持つ教育をするにはどうすればよいか。私たちが真剣に考えなければいけない。

大豆生田

幼稚園では、けんかやトラブルが起こった時、その場で子ども達に聞きながらどうしていったらいいのか、先生と子どもで考えていくことが重要な道徳教育である。今は、保護者が喧嘩やトラブルを望まなくなり、幼稚園も未然に防がなければといった中で、学びの場がなくなっている。

奈須先生

国際化が進み、むしろ世界的にはトラブルが起こりやすい時代

に突入している。子ども達は小さいうちからトラブルに対し、協同で、あるいは異文化の人と折り合いをつけて問題解決する経験を積んでいくほうが良い。子どものトラブルは社会に繋がる。子どもの言い分・現状の様子を丁寧に聞いて、解決に繋げていくことが大事である。子どもは現状に対する想いを丁寧に聞かれ大事に扱われると喜ぶし、先生を好きになる。そういうことを保護者に対しても粘り強く説いていくことが大事で、一人ひとりからよく話を聞くことは、家庭教育の向上にも繋がっていく。

まとめ

奈須先生より

生まれてから死ぬまで人間は学ぶ、考えるということが一度も原理を変えずに一貫した教育を設計できる時代がようやく到来した。これまでは、幼児教育までが子ども中心であって、小学校から大学まではコンテンツベースで、大人の世界に出たらまた協同的に問題解決を迫られるということをしてきた。それを小学校から大学まで一生涯人間的にやっていくということになっていく。幼稚園は悩まずに、本来の姿で子どもの一生涯を支える、そして基盤を作っていくって欲しい。とても期待している。



分科会

第1分科会 特別研究委員会1

神奈川産業振興センター



子どもの育ちを支える親との連携とは
～親の気持ち・子どもの気持ち・保育者の気持ち～

助言講師 ● 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授

先生

第1分科会では、『子どもの育ちを支える親との連携とは』をテーマに、“親の気持ち・子どもの気持ち・保育者の気持ち”それぞれの気持ちを大切に、お互いの気持ちが重なるようにするにはどのようにしたら良いかという研究内容が発表された。

まず始めに2人の先生から自らの体験事例のお話があった。1つめは、幼稚園では良い子だが家では暴君の子どもと、その親について。2つめは、幼稚園に馴染めずにいた子どもと、その親について。

それぞれ保育者がどのように対応したかという内容である。保育者は少しでも連携を取ろうと積極的に電話をしたが、反対に親はそれを負担に感じていた。どちらの例も親の思いや置かれた状況を感じながら、子どもの思い、保育者の思いを重ねることが大切とのことであった。

グループディスカッションでは、事例を踏まえて各園ではどのような連携を取っているのかを話し合った。様々な幼稚園の発信の方法や、保護者対応を聞くことが出来た。

今回の発表を聞き、親と保

育者の気持ちが一緒になるには、必ず間には子どもの気持ちがあると知った。親と連携をとる為には、保育者として子どもの悩みを伝えるだけではなく、その子の成長や日常の面白いこと等を積極的に伝えていくことが大切だと感じた。

(汐見台中央幼稚園 大古 紗也)



第2分科会 特別研究委員会2

県民ホール6階会議室



「子どもの育ちの物語」
～遊びの中の援助を探る～

助言講師 ● 青山学院大学教育人間科学部教授 小林 紀子 先生

第2分科会では、特別研究委員会の5園の先生方6名による学齢毎の事例発表が行われた後、参加者全員が20ほどのグループに分かれ、今回の事例発表および遊びの中の援助というテーマについてグループディスカッションを行った。その後グループ毎に討議の内容を発表、小林紀子先生から助言を頂き、質疑応答を経て終了となった。

事例発表では3歳児、4歳児、5歳児のグループ毎の発表が行われどのグループも対象児を一人に

絞った中でとても丁寧に観察、援助が行われていることに感心した。中でも5歳児の事例では、独創性は光るものの他者とのかわりが苦手なAちゃんが保育者の適切な援助により少しずつ確実に成長していく姿には感銘を受けた。今、目の前の子ども達に自分がどれだけ深くかかわれているか、改めて振り返ると共に自園においても育ちを実感できるような援助を実践するための参考となった。

講評として小林紀子先生からは今回の事例発表で横浜

市の先生方の高い専門性に感心したとお言葉があり、また「遊びは重要な学び」であるが体験(遊び)と経験(労働・学習)のバランスをどう取るかがポイントであるという貴重なアドバイスも頂いた。

(田園都市幼稚園 志田 元)



第3分科会 特別研究委員会 3

神奈川県民ホール 小ホール



どの子にもうれしい保育の探究 ～障がいのある子どもや関わりの難しい子どものいる保育実践を考える～

助言講師●國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授 野本 茂夫 先生

第3分科会では、「どの子にもうれしい保育」をテーマに2人の先生が実践事例を発表した。

発表では、障がいのある子どもとのかかわりの中で生まれた保育者の悩みや反省点などが語られ、同時にクラスの友達の影響、行事への参加とその効果、そして他の保育者との連携の大切さなどが紹介された。

生き生きと自分のやりたいことを楽しんでいる時の子どもの表情は本当にきらきらしている。子どもな

りに、担任の見えていないところでも楽しいことを見つけたり、自分の世界で表現を思い切り楽しんだりしている。同時に友達やクラスの様子を気にして見てもいる。子どもが本当にやりたいことを分かってあげなければならない。子どもの「今」、その子の「世界」を大切にしながらかかわっていくことの重要さに気づくとともに、フリーの保育者との連携の大切さに改めて気づいた。

また無意識のうちに子どもを枠から外れないように縛ってしまうことへの反省なども

述べられた。

野本先生からは、枠の中に収め揃えようとする既存のイメージの枠組みを広げ、特別な支援を必要とする子どもも枠内に収めた、新しい保育のイメージの提案があった。

(上白根幼稚園 上野 美喜子)



第4分科会 神奈川支部

横浜ワールドポーターズ

「試してみようブレインジム」 ～身体の動きを通して心に働きかける教育モデルを体感する～

助言講師●ラーニングクエスト学習センター代表

天田 武志 先生

助言講師●NPO法人日本教育きねしおろじー協会理事長

田村 優子 先生



第4分科会では、天田武志先生により、ブレインジムとはどういったものなのか、ブレインジムを取り入れた各園の子ども達の様子や変化が事例と共に発表された。

映像で、ブレインジムの効果を測定する指標としての「線上歩行」や「50歩歩行」が映し出され、効

果としての即効性はすぐに見られなかったが、子ども達の成長を感じることができた。

ブレインジムは子ども達の成長段階や状態を知る手掛かりになり、落ち着きがない子どもや、身体のバランスが悪い子ども達の活動の一つとして、様々な場面で活用できることが分かった。そして、生活の中で繰り返し継続して行うことで、子ども達の気持ちが高揚し、体幹を鍛えることへ繋がるということも学んだ。

保育をする上で子ども一人ひとりの中に何を育みたいのか、一人ひとりがどのような

体験を必要としているのか、それぞれの子どものに合った保育を考えながら取り入れていくことが大切なのだとして改めて学ぶ機会となり、今まで実践してきた手遊びや体操にも取り入れていくことができる内容が多々ある有意義な学びとなった。

(相沢幼稚園 小林 智美)



第5分科会 保土ヶ谷支部

横浜ワールドポーターズ



第5分科会では、鈴木先生を助言講師に迎え、遊びの中で子どもは育つというテーマで5人の先生が発表した。

まず、発表者が身近な素材で簡単に作れる遊びとして、飛ばすもの・動くものなどを紹介した。参加者も、チラシを使って紙飛行機を実際に作り、楽しさを体験した。その後、3歳児・4歳児・5歳児の遊びの事例をあげ、その中で子どもたちがどのように育ったかを発表した。

その結果、遊びの中での子ども

「遊び」の中で子どもは育つ！ ～子どもが輝くとき～

助言講師●聖ヶ丘教育福祉専門学校 鈴木 恵利子 先生

の育ちには「個々の遊び」が「全体の遊び」へと繋がること、異年齢の子ども達との交流の機会、そして園全体の連携が重要になっていくことが分かった。

また鈴木先生からは、保育者の理解が最も大切であるというお話があった。子どもが安心して楽しめるような環境作りはもちろん、子どもの何が変化していったかを日々考え感じること、認めてあげることが重要になる。また、それを行うことで、子ども自身も自信がつき、自ら考えながら遊びに参加できるようになる成長へ

と繋がっていく。そして、保育者はその成長を保護者にも伝え、幼稚園全体で共有していくことで子ども達や保護者が幸せな毎日を送ることができる「子育て支援」になることがわかった。

(汐見台東幼稚園 尾山 侑子)



第6分科会 金沢支部

ワークピア横浜 3F



第6分科会では“一人ひとりの良さを伸ばすクラス作り”テーマに、司会の概要説明に続き、4つの項目に分けて発表が進行していった。

最初の発表では、2名の研究員の先生から日本の子どもの現状について、国際比較調査報告を基に具体的な説明があった。2番目に金沢支部教員アンケート調査結果を元にした『保育で大切にしていること』を経験年数別に比較し、解りやすく説明した。3番目は、子どもの興味関心を高める、身近な

一人ひとりの良さを伸ばすクラス作り

助言講師●聖徳大学幼児教育専門学校教授 中山 博子 先生

助言講師●臨床心理士

原 智恵子 先生

ものを使った自作遊具の実例として、牛乳パックのびっくり箱・仕掛け絵本・うちわ型遊具・スーパー紙飛行機の作り方を、研究員4名が紹介した。最後に『子どもの自尊心を育てる実際』について3園の事例報告を中心に発表があった。

まとめとして、助言講師の原千恵子先生が「子どもは幼稚園の中で自己発揮し、その子らしく主体的に遊ぶことを基盤として、自己肯定感や依存心を育む」と言及された。続いて同中山博子先生は「保育者が子ども一人ひとりの良さをきちんと観て、認め、伸ばして

いくことが重要であり、個の育ちを基本として、クラスの集団としての教育力が培われる」と総括された。

子どもの良さを伸ばすために、子どもを中心とした環境づくり等、さまざまな視点とアプローチが必要なのだと改めて学ぶ機会となった。

(育和幼稚園 中尾 有里)



第7分科会 青葉支部

横浜市教育会館



青葉支部では、手品とパントマイムについて、2年間の研修を行ってきた。発表は、まず研修の様子や実践報告について、VTRでの説明があり、研修により技術を獲得しながら、打ち解けあっていく保育者の様子や、実際に園で保育者が手品を披露した時の実践報告がなされた。

印象的だったことは、手品やパントマイムは、単に楽しいというだけでなく、子ども達の「やってみた

手品っておもしろい ～子どもや大人も手品が大好き!～

講師●笑太夢&キラリン

い」という気持ちを引き出すことで、自分なりに表現したり、友だちとイメージを共有したりして、表現することの楽しさや充実感を味わい、表現する意欲や創造性を豊かにしていくものだというのである。

同時に、ただ手品やパントマイムを見せる環境を作るだけでなく、その後の子ども達の気持ちに共感し、共有しあうことを通して、子ども達のイメージをより豊かにしたり、表現したいという気持ちを育てたりすることが、保育者の役割であるということ、改めて再認識することができた。

その後、研修成果として、保育者

による手品やパントマイムが披露され、最後に会場の参加者全員に配られたストローを使って、簡単にできる手品を実際に練習し、習得することができた。各参加者が受け身でなく、実際に楽しさを味わう体験ができたことにより、明日にでも保育に活かせる有意義な発表であった。

(桐蔭学園幼稚園 並河 誠)



第8分科会 栄支部

ワークピア横浜 2F



子どもの育ちを保護者と「ともに」みて、 「ともに」支えていくための工夫とは

助言講師●田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科准教授 高嶋 景子 先生

栄支部では、それぞれの保育者が実際に保護者とかかわった事例を持ち寄り助言講師の高嶋先生と共に一年間研修を行ってきた。保護者と、幼稚園での子どもの姿を共有するための方法として、「園だより」「クラスだより」「個人面談」「電話」「登降時に話をする」等がある。そもそもこのような発信はなぜ行っているのか、そのことが子どもや保護者のどのような変化に繋がっていくのかを振り返り考えた。

事例では、気になる子に対してその子とのかかわり方、行事などの

取り組み方、成長過程、周りの子ども達のかかわり方などを懇談会で保護者の顔を見ながら話すことで「おたより」では伝わりにくいことが伝えられる。又、気になる子どもを補助している保育者と担任が連携を密に図り成長を見守るという事例を聞いた。

その後、4～6名のグループに別れ各園の発信方法を聞くことができた。保護者が幼稚園で生活する子ども達の様子を見る機会は限られている。子どもの育ちつつある姿やその時抱えている課題を保護者と共に共有し、共に考えてい

く関係を構築することで、保護者の不安解消に繋がり、保育の意図の共有にも繋がってくると考えられることから、発信・コミュニケーションをとることは保護者にも、子どもに対しても支援することになると再確認した。

(小菅ヶ谷幼稚園 高橋 友未)



第9分科会 泉支部

ヨコハマジャスト



カウンセリングマインドから見える これからの保育

助言講師●臨床心理士 鈴木 由美子 先生

泉支部研究会では、「カウンセリングマインドから見えるこれからの保育」をテーマに今年度、研究会で学んだことの事例発表を行った。

事例では、一人の年中児の入園当初の様子から、集団の中で成長する姿、保育者と保護者との関わり作り、保育者と年中児の関わりの中で配慮していることや声掛けが紹介された。

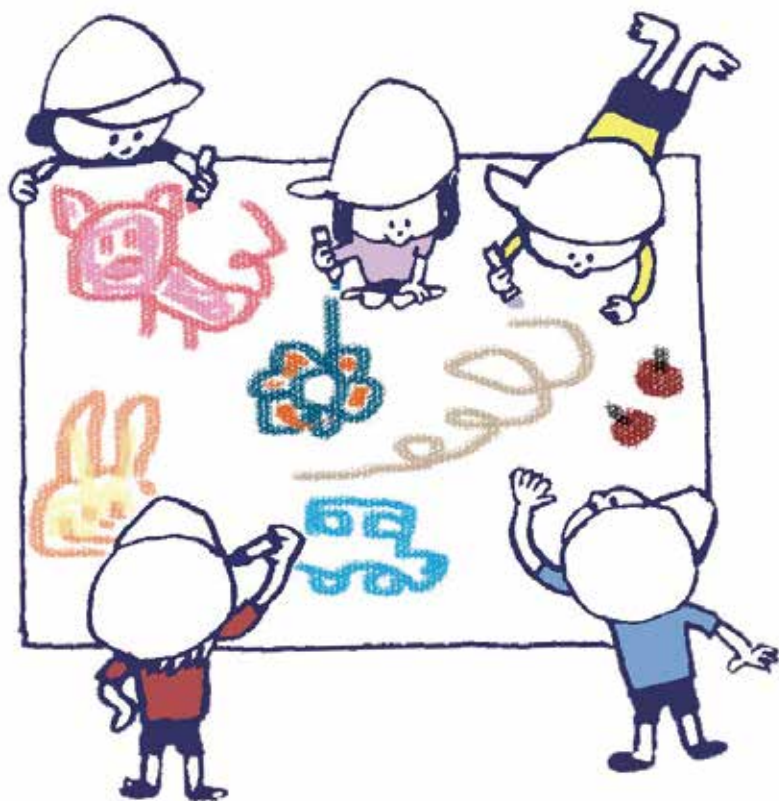
発表をもとに切り替えの難しい子への対応、保護者への伝え方について、分科会参加者でグループごとにディスカッションを行った

ことで、より考えを深めることができた。

鈴木由美子先生による講演では、カウンセリングマインドについての概念や保護者とのコミュニケーションの取り方、愛着を持つことの大切さ、園の生活を目で見て分かるように写真やイラストにして伝えるユニバーサルデザインについて分かり易く説明されていた。その話の中で、「気になる子の障害が強くなるかどうかは『周りの大人の力量』にもよってくる」と言う言葉がとても胸に響いた。持って生まれた素質をどうするか

は、私達保育者によっても変わってくるということだ。普段の保育の中でどんな子どもにも過ごしやすい環境を作ることと、保育者としての声掛けの大切さを改めて考える研究会となった。

(上飯田幼稚園 大村 祐佳)



編集後記

心配していたインフルエンザも、加湿器や消毒液を散布しているクラスよりも、寒くても窓を開けて、なにより換気に努めているクラスの方が流行を押さえられていた気がします。

本年度の研究・研修活動もこの教育研究大会での発表を期に一段落となりました。27年度からスタートする新制度も教育・保育、特に教育の部分を受け持つのはこういった日頃からの研究・研修活動にあります。特別研究班、各支部研究活動が一人ひとりの子ども達のかげがえのない幼稚園生活を過ごす中で成長の一助になると信じています。

(広報部 安藤 宗博)